

## 会長の任期を終えて

小杉信博 (高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所)

石川哲也前会長と朝倉清高新会長の間の2017年10月から2019年9月末までの2年間、第19代日本放射光学会長として何とか無事に務めることができました。会員の皆様のご理解、ご支援をありがとうございました。会長に決まったとき、自然科学研究機構分子科学研究所の所属でしたが、その後、つくばに異動することになりました。そのような落ち着かない状態でありながら、最初の重要な時期を乗り切ることができ、2年間を通して順調にやってこられたのも、学会の評議員等で経験豊富な幹事の皆さん(内海渉さん、稲田康宏さん、籠島靖さん、組頭広志さん、矢橋牧名さん)、評議員会議長の足立伸一さん、学会事務局の佐藤亜己奈さんの大活躍によるものです。評議員の皆様からの温かいアドバイスにも助けられました。この場をお借りして感謝申し上げます。

この最後のご挨拶では、前半に石川前会長から引き継いだこと、後半に朝倉次期会長に引き継ぐべきことを説明したいと思います。まず、前会長から引き継いだことですが、学会提案の次世代放射光施設(軟X線向け高輝度3 GeV級放射光源)計画を進めること、放射光科学賞の定着が特に重要でした。前者については、石川前会長時代に、学会として日本学術会議マスタープラン2017に提案し、文部科学省研究振興局所掌の科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会でロードマップ2017にも採択済みでしたが、その一方で、文部科学省科学技術・学術政策局所掌の科学技術・学術審議会研究計画・評価分科会量子ビーム利用推進小委員会でも量子科学技術研究開発機構が主体となることまで決まっていた。私が引き継いだ時点では、概算要求とパートナーの選定の検討が始まったころでしたので、関係者の内海さんを庶務幹事をお願いすることにしました。そのことによって、学会執行部がタイムリーに情報を得て、評議員会等の場で意見を伺うなど、学会を通じたオールジャパン体制を整える方向に進めることができました。

後者の放射光科学賞(学会賞)については、第1回(2018年)、第2回(2019年)の受賞者として、北村英男先生、雨宮慶幸先生をそれぞれ選考することができました。第3回以降も継続的に学会賞の歴史を作りあげることによって学会のプレゼンス向上を図っていくことが重要と考えています。一方、功労報賞は2014年から始まっていますが、第3回からは受賞者がいない状態が続いています。2021年度からの第6期科学技術基本計画に向けて

技術職員の重要性がクローズアップされている中、毎年、受賞者を出すことで学会の立場も明確化できますので、特別賛助会員から直接、候補者推薦をいただくなどの新たな方策を図ったところでした。実は、1997年から始まっている最も歴史ある奨励賞でも第3回は受賞者なしでした。第3回が鬼門と言えるでしょう。今はそれを乗り越えて第4回からこれまで毎年、受賞者を出しており、若手の登竜門として定着しています。第22回(2018年)では大坪嘉之さん、松井公佑さん、第23回(2019年)では井上伊知郎さん、黒田健太さん、山下恵太郎さんを選ぶことができました。いずれも応募者多数で、応募者の中から受賞者を選ぶことは紙一重の差で苦勞しました。このように奨励賞候補になる若手が次々と現れてくることは学会の将来にとって重要なことです。

次期会長に引き継ぐべきことは、日本の放射光施設のグランドデザインを考えていくための各放射光施設との関係構築、アジアにおける日本のプレゼンスを高めていくためのAOFSRRとの関係構築です。涉外幹事にこれらに対応してもらいましたので、詳しくは矢橋さんの報告をご覧ください。ここでは、その背景のみ説明しておきます。学会は各放射光施設と直接の関係をもっているわけはありませんし、特定の関係を避けてきたとも言えるでしょう。ただし、アジア地区にある放射光施設が現状と将来を話し合う場としてアジアオセアニアフォーラムAOFSRRがあり、AOFSRRの日本代表理事を日本放射光学会長が務め、拠出金を学会が負担しなければならなくなったときに、各施設に協力依頼するために特別賛助会員という新たな会員制度が作られました。現在、特別賛助会員は各放射光施設(共用施設の場合、設置者と登録機関)以外に、各施設で専用ラインを運営している組織の一部が加わっています。特別賛助会員を通じて学会と各放射光施設の関係が明確化したと言えます。また、日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム(年会・合同シンポ)の開催地としても各施設に頼らざるを得ないのが実情です。学会がお世話になってばかりの中で学会側から還元できることも考える必要がありました。そこで、学会執行部では、国際的な観点からも施設間連携の機会を増やす方策をいろいろ考えてきました。今後もこの方向性が引き継がれることを願っています。

以上、前会長から引き継いだことと次期会長に引き継ぐべきことを報告しました。なお、若手支援も大きな柱とし

て掲げ、その枠組みの中で、会計幹事の稲田さんには、長期的剰余金の使い道として学生会員のための国際活動支援奨学金を考えていただきました。AOF SR スクールに学生会員を数多く参加させることは、単にアジアにおける日本のプレゼンス向上ばかりでなく、学会の将来にとって重要であるとの認識に立った、新たな若手支援策ですが、若手支援策は他にもいろいろ考えられますので、長期的視野に立った方策が今後も必要だと思います。編集幹事の籠島さんには日本中性子科学会との連携記事や放射光ビームライン光学技術入門の出版（電子版およびオンデマンド印刷版）などの労を執っていただきました。また、年会・合同シンポ組織委員会と学会は会計上、独立にはなりませんが、2018年1月の第31回年会・合同シンポはPF関係者および組織委員長の矢代航さん（前行事幹事）にお世話いただきました。2019年1月の第32回年会・合同シンポはSAGA-LS関係者および組織委員長の組頭さん（行事幹事）にお世話いただきました。特に第31回では日本放射光学会設立30周年を祝うことができました。

この2年間で残念なこともありました。INS-SOR, PF,

SPring-8 と世界を先導してきた日本の放射光科学における3人の偉大な歴代会長をお見送りしなければならなかったことです。第1代会長高良和武先生（2019年1月31日逝去、享年97）、第2代会長佐々木泰三先生（2019年9月20日逝去、享年95）、第9代会長上坪宏道先生（2017年11月13日逝去、享年84）です。日本放射光学会誌第11巻第2号（1998年）82-92ページに佐々木泰三先生が書かれた「放射光研究50年の回顧と展望」という記事があります。これに依りますと田無の東京大学原子核研究所で1961年に完成した電子シンクロトロン（ES）で1962年に放射光を確認し、放射光利用申請が始まったとあります。昨年はイギリスで放射光50年の国際シンポジウムUKSR50が開催されましたが、2012年に日本の放射光50年を祝っていれば3先生に参加いただけました。10年遅れになりますが、今は亡き偉大な3先生のご功績を讃える意味でも、2022年に国際シンポジウムJSRF60を学会主催で開催したらいいのではないかという提案で、最後を締めくくりたいと思います。

---

## 2019年度幹事報告

---

### 庶務幹事を終えて

内海 渉 (量子科学技術研究開発機構)

2年間の庶務幹事としての任期を何とか無事に勤め上げることができ、ほっとしているところです。先人の方々の尽力によって整備された基盤の上で、事務局、選挙、評議員会、総会、学会各賞授与などの定常的な学会運営を、大きなトラブルなく安定的かつ円滑に進めることができたこと、多くの皆さまのご協力の賜物であり、心よりお礼申し上げます。

この場を借りて「マスタープラン2020」ならびにそれへの本学会の対応について書き留めておきます。ご存じの方も多いと思いますが、マスタープラン(正式名称は「学術の大型研究計画に関するマスタープラン」)とは、内閣府の特別機関のひとつである日本学術会議が、我が国の大型研究計画のあり方について一定の指針を与えることを目的として策定するものです。「大型施設計画」と「大規模研究計画」の2つのカテゴリーがあり、ほぼ3年ごとに策定され、今回は2020年に公表されます。学術研究にもお金のかかる時代であり、新規大型プロジェクトに関しては、このマスタープランに採択されていることが、予算化されるためのほぼ必要条件になっています(残念ながら十分条件ではない)。「マスタープラン2020」では若干の制度変更があり、【区分I】(新規応募計画及び前回マスタープラン区分I掲載の計画)と、【区分II】(前回マスタープランに掲載され、かつ現在実施中・進行中の計画)に分けて公募・審査・採択がなされることになりました。【区分I】で採択されたもののうち、速やかに推進すべき計画

が「重点大型研究計画」として選定されるのは以前と同じです。

これまで放射光学会では、歴代会長が申請者となり、新放射光施設の実現を目指した提案書を「マスタープラン2014」、「マスタープラン2017」に応募し、重点大型研究計画に選定されています(計画名称「新しい時代の科学技術立国を支える放射光科学の高輝度光源計画」)。そしてこの提案をベースとした「次世代放射光施設」が東北に建設されることになり、プロジェクトがスタートしています。この状況を受け、2019年3月締め切りの「マスタープラン2020」の提案募集に関しては、本学会として2件の応募を行うこととしました。すなわち、「マスタープラン2017」に採択された内容を踏襲し、タイトルを「官民地域パートナーシップによる次世代放射光施設の推進」に変更したものを【区分II】に提出するとともに、新たな提案となる「放射光学術基盤ネットワーク(大規模研究計画)を【区分I】に応募しました。後者は、多様な共同利用・共同研究により優れた研究成果の創出と人材育成を長年にわたり担ってきた、学術基盤としての3施設(PF, UVSOR, HiSOR)を中核とした学術基盤の強化とネットワーク化を進め、わが国の放射光科学を継続的に向上させる体制を構築することを目的とするものです。現在、日本学術会議において審査が進められており、2020年初旬には結果が公表されるはずで、その採択を期待を持って待ちたいと思います。

---

### 行事幹事を終えて

組頭広志 (東北大学多元物質科学研究所/高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所)

2017年10月から行事幹事に就任いたしました。早いものでもう二年が経ちました。行事幹事は、組織委員長として現地実行委員と共に年会・放射光科学シンポジウムを司る重責に加えて、若手研究会や基礎講習会などの育成・啓蒙活動を司る重要な役割です。はじめは、そうとは知らず安請け合いをしてしまった気もしていましたが、振り返ってみると「学会(学問領域)の継続・発展とは」ということについてすこし長期的な視点で俯瞰する良い機会になり

ました。任期中は私なりに少しでも今までのやり方を変えてみようといろいろ試みたりした二年でした。皆様の協力のおかげで、すこしは新しい試みも出来たかなと思われるところです。ただ、感慨に耽るにはまだ早く、年度内はJSR2020の組織委員長としての責務が残っております。そのため、まだまだ「終えて」という気持ちではありませんので、活動報告という形で本稿をまとめたいと思います。着任一年目の活動報告については昨年の「この一年」

の記事に譲るとして、以下、第11回基礎講習会、第11回若手研究会、第32回年会・放射光科学合同シンポジウム(JSR2019)、第33回年会・放射光科学合同シンポジウム(JSR2020)準備の四件について、この一年の報告をさせていただきます。

まず、基礎講習会ですが、これまで第3回(大阪)を除いてずっと東京で開催されており、参加学生の80~90%が関東圏の学生という状態でした。一方、放射光ユーザーは全国各地にいることを踏まえて、少なくとも私の任期中の第10回と11回は、基礎講習会を東京以外で開催しようと考え、第10回の仙台(東北大学)に引き続き第11回は名古屋(名古屋大学)で開催いたしました。その詳細は別紙に譲るとして、今回もとても活発な基礎講習会になりました。残念ながら収支の面では、第10回、11回ともに講師の先生方の出張費がかさんで赤字になってしまいました。しかしながら、この基礎講習会は光源やビームラインなどの放射光の基礎を系統的に学べる放射光学会ならではのものですので、啓蒙活動という観点から続けて行くべきだと強く思った次第です。

次に若手研究会ですが、これまた詳細は別紙に譲るとして、今年も成功裏に終わりました。昨年度の「この一年」の記事で、「放射光学会研究会」ではなく、「若手」がつく研究会ですので、荒削りでもいいのもっと萌芽的で、今後の放射光科学における新しい潮流を模索するような挑戦的な提案を期待する」と書かせていただきました。もし、JST 研究開発戦略センターの「研究開発の俯瞰報告書」等ですでに提案されている戦略目標と類似の内容でしたら、(すでに他の研究会などで聞いた話をまた聞くだけなので) やっても意味がないのではと考えておりました。と

ころが、予想に反して、今回は2件の応募があり、どちらも挑戦的な(挑戦的すぎる)内容でした。若手研究会公募といった機会は、どんな面白い提案が出てくるかわかりません。設けておくこと自体に意味があるということを勉強させていただきました。

JSR2019につきましては、実行委員会の妹尾与志木委員長、副島雄児副委員長、郭其新副委員長、プログラム委員会の高原淳委員長、岡島敏浩副委員長のもとで、非常に盛況な年会・合同シンポジウムになりました。初めての福岡国際会議場での開催ということで、予期せぬ問題も多々ございましたが、交通アクセスもよく、年始の九州開催にも関わらず参加者も企業展示もつくば JSR2018@つくば(PF)や JSR2017@神戸(SPring-8)開催並みになりました。JSR2020 に関しては、実行委員会の曾田一雄委員長、宮崎誠一副委員長、竹田美和副委員長、解良聡副委員長、プログラム委員会の解良聡委員長、田中清尚副委員長のもとで、開催に向けた準備が鋭意進められております。近くに UVSOR とあいち SR を擁する名古屋開催ですので、数多くの参加者・企業展示が期待されます。

最後になりますが、第11回基礎講習会講師の先生方、第11回若手研究会審査委員会委員および主催者の皆様、JSR2019 関係委員会メンバーの皆様、行事委員の皆様、矢代航前行事幹事、そして何より小杉会長、幹事の皆様には、たいへんお世話になりました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。また、JSR2020 関係委員会メンバーの皆様、(株)ポラリス・セクレタリーズ・オフィスの中村千佳さん、学会事務局の佐藤亜己奈さん、には、組織委員長として引き続きお世話になりますが、何卒よろしく願い申し上げます。

## 編集幹事を終えて

籠島 靖 (兵庫県立大学)

学会誌「放射光」は年6号発行ですので、2年間で12号に編集委員長として携わりました。無事に全号を発行することができ、安堵しています。著者、査読者、編集委員、会長をはじめとする本学会の幹事の先生方、事務局の方々など、発行にご協力・ご助言いただいた多くの皆様はこの場を借りて心よりお礼を申し上げます。

学会誌発行に加えて、単行本「改訂版 放射光ビームライン光学技術入門~はじめて放射光を使う利用者のために」(電子版およびオンデマンド印刷版)を発売しました。「増補版 放射光ビームライン光学技術入門」は2016年10月に計461冊(初版を含め累計1,622冊)を販売完了しましたが、引き続き入手希望が多く寄せられていました。そ

の要望を受け、学会の若手支援事業の一つとして、改訂版を発行することにいたしました。ビームラインに関する有用な参考書を提供できました。編者の大橋治彦先生と平野馨一先生の多大なご尽力に心より感謝申し上げます。

特集号は、31巻で「放射光科学30年の歩みと展望」、32巻で「量子ビームの協奏的利用による先端研究」を企画しました。前者は放射光学会設立30年の節目を迎え、放射光科学30年の発展を俯瞰するとともに次の10年を展望すること意図しました。後者は新しい試みで、本学会と日本中性子科学会との合同特集号を企画しました。両学会誌の記事を両学会の会員がオンラインで相互閲覧可能な環境を整えました。近年、複数の量子ビームを相補的・協奏的に

利用した研究が盛んになっており、異なる量子ビーム利用者間の情報交換や議論を促す場を提供できたのではないかと思います。

今期には、次世代放射光施設の推進にも大きな動きがありました。「放射光ニュース」で随時情報を発信をしました(31巻2, 3, 4, 5号, 32巻1号)。当学会の会長を務められた松下正先生(12代会長)、上坪宏道先生(9代会長)、高良和武先生(初代会長)が逝去されました。雨宮慶幸先生(14代会長)、石川哲也先生(18代会長)、千川純一先生(3代会長)に追悼記事をご執筆いただきました(31巻3号, 2号, 32巻3号)。この記事を書く直前に、佐々木泰三先生(2代会長)の訃報が届きました。学会誌の記事で振り返ると、今期は当学会にとって大きな節目の年であったように思います。

長らく途絶えていました「新博士紹介」を復活させました。多くの新博士の方からの投稿をお待ちしております。

放射光科学のコミュニティは、加速器という大型装置技術・通常サイズの実験装置・検出器、物理学・化学・生物学・医学・工学、物質科学・生命科学・地球科学、学術と産業利用、計算科学や他量子ビームとの融合など、まさに学際的なコミュニティとなっています。この幅広いスペクトルからなる放射光学会員の皆様を繋ぐ媒体として学会誌「放射光」は大きな役割を果たしていると思います。学会誌「放射光」を情報発信の場としてご活用頂くことが、学会誌「放射光」をより良くする助けとなると考えます。本学会の更なる発展を祈念して拙文を終わりにいたします。どうもありがとうございました。

---

## 渉外幹事を終えて

矢橋牧名(高輝度光科学研究センター)

前任の雨宮健太先生から引き継ぎながら、この2年間、渉外幹事として学会活動に携わってきました。小杉会長のリードのもと、従前の活動に加えて、いくつかの新たな試みも行ないました。

一つは、「拡大放射光施設代表者会議(代表者会議)」の設立です。欧米では、各地域内で放射光施設間のネットワークを強化する動きが進んでいます(例:EUのLeague of European Accelerator-based Photon Sources:LEAPS)。多くの放射光施設を抱える我が国でも、各施設で役割を分担しながら「放射光施設群」としてのグランドデザインを考えていくことが、内外から求められるようになってきました。この課題に学会として取り組んでいくために、2019年3月に第1回の「代表者会議」を行ないました。参加者は、放射光学会の特別賛助会員(各放射光施設・専用ラインの設置・運用団体)からの12名に加え、文科省量子研究推進室からも陪席を頂きました。会議では、グランドデザインの検討とともに、各施設の抱える諸課題を提示頂き、議論を行ないました。これを踏まえて、4月の評議員会でさらに議論を重ね、最終的に「日本学術会議 マスタープラン2020」に「放射光学術基盤ネットワーク」として提案を行ないました。本会議は、今後も毎年開催されます。施設間の情報共有・役割分担の促進とともに、技術交流・人材交流の具現化につながると幸いです。

もう一つは、アジアオセアニアフォーラム(AOFSRR)への対応です。AOFSRRの主要な活動の一つとして、若手(大学院生、若手の研究者・エンジニア)を育成するための国際スクールの開催があります。従来は、ケイロンスクール(@SPring-8)という形で開催されてきましたが、2017年から、メンバー国が持ち回りで行なうAOF SRスクールという形式に変わりました。今回、AOF SRスクールへの派遣者に関して、特別賛助会員からの推薦を募った上で、学会の選考委員会で決定するというプロセスを確立しました。さらに、会計幹事の稲田さんにもサポートをいただきながら、参加学生会員の負担を軽減・免除するための国際活動支援奨学金制度も開始しました。

また、AOFSRRでは、アジア・オセアニア地域におけるAO-SRI会議を3年毎に開催することになりました。第1回AO-SRI会議は、2020年に日本で行なわれることになり、特別賛助会員とともに議論した結果、東北放射光施設関係者にお世話いただくことになりました。学会としても様々な支援を行なっていくこととなります。

リソースが限られた中でアクティビティを高めていくためには、国内、海外を問わず、ネットワークの強化が今後ますます重要になってきます。学会としての活動は後任の中村哲也先生に引き継がれますが、私自身も、異なる立場から、連携の促進に貢献していきたいと思っております。

## 会計幹事を終えて

稲田康宏 (立命館大学)

小杉会長の下、2017年10月からの2年間にわたり会計幹事を務めさせていただきました。これまでの会員の皆様のご協力によって、日本放射光学会は健全な財政状況での運営がなされており、それを踏まえて、学会として有効な取り組みも進めることができた2年間であったと思います。放射光科学を中心とする研究者コミュニティがこれまで以上にさらに発展するためには、先端的な研究・開発の推進に加え、将来を担う若手研究者の育成とその支援も、日本放射光学会に期待される重要な役割の一つと考えます。若手研究会、放射光基礎講習会、日本放射光学会奨

励賞など通じた支援が行われていますし、日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウムでは学生会員発表賞によって学生の研究奨励をしています。2019年度からは、AOF関連の取り組みへの学生会員の参加を支援する奨学金を新設し、より一層の若手支援を展開しています。大学に勤める一員として、若手研究者の育成にも貢献できるよう、今後も努力していく所存です。

今後の学会の益々の発展を願い、会計幹事を高橋嘉夫先生に引き継がせていただきます。2年間、本当にありがとうございました。